作者： 青木　清高
2011年 7月 13日(水曜日) 00:00 - 最終更新 2011年 7月 18日(月曜日) 14:40

この有田の街で、生きてゆくためには、たとえ陶芸作家と言えども、同じ形状の物を何個でも作れるという職人としての技術が要求される。

そこで、父は友人でもあった中村清六先生のもとに、私を修行に出してくれた。ちょうど昭和５１年春頃のことである。

１０代でこの世界に入られて、後に県の重要無形文化財白磁保持者にまでなられた先生は、大変な苦労人であったが、不思議と辛かった時の話は一切されなかった。先生の工房では、いろいろなことを勉強させていただいた。
先生の偉大なところは、単に一流のろくろ技術の持ち主、継承者ということではなく、それを凌駕した人のみが持てる、物作りとしての品格と、深い精神性にあると思う。

今年は、先生の初盆である。先生の御霊は、迷うことなく清六の地に着かれたであろう。

作者： 青木　清高
2011年 7月 13日(水曜日) 00:00 - 最終更新 2011年 7月 18日(月曜日) 14:40

作者： 青木　清高
2011年 7月 13日(水曜日) 00:00 - 最終更新 2011年 7月 18日(月曜日) 14:40

作者： 青木　清高
2011年 7月 13日(水曜日) 00:00 - 最終更新 2011年 7月 18日(月曜日) 14:40

作者： 青木　清高
2011年 7月 13日(水曜日) 00:00 - 最終更新 2011年 7月 18日(月曜日) 14:40

清六窯での先生と修行中の自分　　昭和５７年頃撮影